



## 「個性尊重」という言葉の錯覚

個性尊重という言葉ほど、戦後教育において誤解を受けた言葉もまたない。多くの学校は、自明のようにこの言葉を教育のモットーに掲げ、父母も教師もまた、当たり前のように自分は子どもの個性を尊重して子育てにあたっていることを語る。

しかし、その内容を聴き質してみると、驚くような個性尊重に出くわすこともある。「家の子どもは、お絵かきが好きなので、先生、算数は教えて頂かなくて結構です。」などという言葉は、その最たるものといっていい。この言葉は、「家の子どもは、アイスクリームが好きなので、先生、根菜類は食べさせなくて結構です。」という言葉と何ら変わりはない。それがいささか誇張に過ぎた事例としても、それを個性といって押し出す、これと五十歩百歩の言葉遣いは、戦後教育の中で頻繁に耳にする流行言葉である。

父母も教師も、疑いもなく人間には初めからアボガドのタネのような、個性という確たる核が存在しているかのように思い込んでいるが、それは、明らかに錯覚ではないのか。

確かに、多用な関心を有する子どもが、ある時絵画に人一倍の関心を示し、ある時理科の実験に人一倍の関心を示す、そのことは、大いにあり得ることである。無論、父母や教師は、子どもが示す、そうした関心の瞬間を見逃してはならないし、父母や教師は、そうした関心の芽生えを看取したら、これを大事に尊重し、伸ばす工夫も施さなくてはならない。しかし、そうした関心の表明が性急にその子の個性の表出と判断することは、大いなる錯覚である。

自分の個性というものを初めから解った上で人生を開始した人がいるとしたら、名乗り出てほしいものである。誰も自分の個性や自分の本当の力など知らない裡に人生を歩み始めているのが事実ではないか。むしろ、それまで知らなかったさまざまな知識や事柄や人々に出会い、あるいは自分とは異なるさまざまな感覚や思想に際会し、そうした経験を積む過程の中で、「ああ、自分は、こういう感じ方をする存在なのだ。こういう考え方をする人間なのだ。」と、一步一步自分でも知らなかった自分の個性というものに気づくことになるのだし、自分の個性というものも形づくられていくのだと思う。

人間が明らかに生物体である以上、この比喩は、あながち筋違いではなかろうと思ひ、ある生物学者が書いていたことをここで紹介してみたい。

「高等な生物は受精卵から発生する過程で、一つ一つの細胞が全く同じ遺伝子をもったままで、例えば眼は眼に、手は手に発達してゆきます。この過程を分化と呼びますが、全能的な可能性を次々に失って初めて調和のとれた一個の生体になるのです。」と。

この事実を人間の成長に重ねてみれば、こんな言い方も成り立ち得るのではないのか。例えば、私たちは、成長の過程の中で言葉を話し、文字を覚え、こうした言語能力の発達

によって、動物とは全く異なる精神の圧倒的な表現領域を押し広げていくわけであるが、しかしこうした表現領域を獲得することによって、実は豊饒な身体的表現能力の可能性を取り落としているのかもしれない。しかし、逆もまた真なりで、そのようにして、その人固有の個性が形づくられていくのである。ヘーゲルならば、それを如何にも難しく「形成と疎外の弁証法」と呼んだことだろう。そうであればこそ、子どもを身体表現の機会に触れさせてみることもまた尊いのである。

子どもというものは、どう大きく変貌するかも判らない。政治の世界でよく「大化<sup>おおぼけ</sup>」という言葉聞く。それまで小粒と思われた政治家が、ある職をこなすことによって大物に変身することの譬えである。教育によって大化<sup>たいか</sup>するのが人間なのである。大人の予断をもって、それを個性と性急に断定し、初めから子どもを小さく囲い込んでしまうほど愚かなことはない。食わず嫌いにさせてしまうのではなく、父母や教師の大きな庇護と配慮の中で、子どもにさまざまな可能性に果敢にチャレンジさせてみるからこそ大切なことではないのか。

養老孟司氏が石原慎太郎氏との対談の中でこういうことを言っていた。

**養老** 昔の年寄り「若い人は経験が足りない」とよく言っていました。ここでいう経験というのは、感覚に触れて覚えること、からだを使って覚えることでしょう。でも、今の親はそんなこと、夢にも思っていない。何も経験させない方が安全、ということになっている。夏は冷房、冬は暖房、外に出たら危ないから家でテレビゲームしてなさい、というのが本音でしょう。だから子供たちの感覚世界が痩せて、慢性的な経験不足に陥っている。

**石原** いつからそうなってしまったんだろう。

**養老** 実は、私の世代からだと思っています。私は終戦時に小学校二年生で戦前教育も多少は知っていますが、基本的な教育は全部戦後教育です。——中略—— 私の世代の前と後で何が変わったか、それは、本当の意味での教育がなくなった、ということだと思えます。たとえば、日本的な何かを教わろうとするときに大事なものは、お茶であれお能であれ、「師匠のやるとおりにやれ」という構えです。医学だってそうです。ところが、僕の世代がそれを習おうとしたときに「そんな教育は封建的だ。子どもにはそれぞれ個性があるんだから、それに合わせて教えなければ」となった。でも、子どもの個性って、実はそんなものわかるわけないでしょう。

さて、読者は、この対論から何を読み取るのだろうか。

[>前のページへ戻る](#)